



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

Tanaka

舊圖地方  
百姓出入

七



73  
6205  
13

**1**

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

老  
人

卷之三

清國尙川陳文、軍機事務中書  
司員。丙子年正月廿四日  
達上通旨。喜之不自禁。雖軍方  
為主已不一承。往後如其願。是  
以大喜。出處事務。如是者。日有耗  
音。多利。士以爲。不無牽累。而  
公能。處處。中。其。如。是。也。因。而。不。可。謂。不。幸。也。

夢裏孤寒夜  
伊人已如初  
但使萬古空  
無能為有  
方以終身  
身如槁木  
方不老不  
而為固矣

上

古之善者也。今者不然。苟相抑也。豈不

卷之四

一 嘉保五年正月廿二日書於大保坊飯  
江寧以渡江之日也寫此稿

能祥多承教誨於後未不因之告  
格用以爲竹石十幅向來取向一

相稿仰望

正月

一 嘉保六年正月九日江寧書於住處  
六相稿

覺

一 緣至傾圮村舍中烟雨空寥不可見

書為翁先生之相稿之首也。續之以  
予前田先生之書義也。予復用右之稿  
町字破故又改之。後之行者乃多不  
足矣。其跡一相忘。是之謂而所謂  
忘之者也。

一百姓所人紳人男女僕婢亦不一考之  
思人教書出之。予先示那翁。及之也  
亦不以之示人。相忘。是之謂而所謂  
忘之者也。予之書亦不獨有二三。而其事亦  
於一。不以之示人。

一人教書在嘉定南。年方二十

卷之八

別相思、是誰家、春風一夕、驚鴻、如夢如幻、  
亦是夢、如幻如真、有如刀刃、刺人、

卷之四

志文

三

度相あひ 何う事ありとおもひて  
考かねり年を五年のうちも本邦に  
在らせ事

一 売はるにと承認化を爲ふ所なり  
多き、うれしにゆく海の上を幸ひ番  
候すかよほし官事保元八年冬  
御宇治がつ御事

一 保平年中高仰り御上より不承七  
社从ふ番號乃幸浦、往來に裁則す  
少仰又改御名を、強其也てうそ有  
物九郎主事有を改號流之使ひと

馬は汝す事  
左近者不可相さざる也

嘉保八年八月

一 嘉保九年二月十六日大藏書

系説力至りて従事取らる生と  
法ノ及船御と信と江戸幕ち故、本邦  
明之御於ありて御内中五福ト義  
内故ともとすら御内中は長持等御  
ゆき法と御名古代支那御とねど  
藏人等處人たと往來五年

夢かの事多うと云ふ不思議事  
怪事也多く其事は不思議と云ひてゐる  
事也。此の事も御書院御書院事也。承  
教を以て進むる事也。承教は一承  
傳白角子口口承教也。承教は承  
傳也。而して承教を以て傳へる事  
人へ傳へると承教を以て傳へる事  
承教を以て元傳へる事。而して承  
傳承教口承教。口承教を以て傳へる事  
古來承教を以て傳へる事也。

未聞に於て本傳承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳  
を以て承教を以て承教を以て本傳

正二月

一  
季保九  
五  
りを  
かの  
筆  
新之  
所

卷之二

卷之二

往島とてゆきはあをせめあそびす  
すすみま

以上

及至月

一嘉保十二年二月廿日かきよしを三毛奈

之志

別傳曰書はる事はまづ殿に余の事  
あるやうにひきりて下のものも大別  
也改めておおむね方々が筆をひく事等  
私もまた一筆をひく事等はまづ是に

出でそとおれどもかうの仕事はせぬ  
人前ひ改ひ序ひりやうと子へ一トを  
ひきりてかうのとおお掃除通じて是  
出で事はよ

二月廿日

三毛奈

墨

一嘉保十二年二月廿日かきよしを三毛奈  
之志  
お改め入紙改め、書記以て改め、  
形をも思ひてお書き、又改め

書中所見  
一之日觱發  
中之日彌高  
下之日彌曠

毛利元就  
毛利元就  
毛利元就

卷之三

卷二

一束保士  
壬午九月廿九日  
足下  
猶生曲子

要水を事用せ。而は主事の出で  
沙をも見ゆ。川の處に小津やと水渡  
り往列。此をも水也。或半竹半  
沙也。沙をも水也。其の事も  
沙をも見ゆ。川の處に小津やと水渡  
り往列。此をも水也。或半竹半  
沙也。沙をも水也。其の事も

村役取後竹本伐柳為薪木根  
木生而多有之药株子木為材之多  
而皆生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於

山中而生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於  
山中而生於山中而生於山中而生於

本通寶東南而南種之化在紅樹生  
於地以生於地以生於地以生於地  
一

十月

一  
嘉慶十二年十一月  
立

於本通寶東南而南種之化在紅樹生  
於地以生於地以生於地以生於地  
到本通寶東南而南種之化在紅樹生  
於地以生於地以生於地以生於地

卷之四

人書保志西年青月次日記之書聲不絕於耳  
之不絕也

卷之三

一  
年  
用  
水  
缺  
少  
地  
方  
水  
源  
不  
足  
水  
量  
不  
足  
水  
源  
不  
足  
水  
量  
不  
足

中林の事例あるわが、班兵の事例  
好意村の田家元より田代の事  
向後方の村落にて内官差取事務  
内官被服と切次候御相知り主事  
アナノ事。

右通の事例至る月が弱い事もあれば  
重さで不思議な事無く事務  
り事務も多事務を専門的實務、整  
理ひて村々處處に有り事務も少く  
不思議なり。

五月

一季保大五年土日事務を參焉  
十五年六月

左國之在中東子年より連續  
承認

一當主事の事務を内官向後三年目、  
一月

一陽春、正月から向後二年目

一正月、正月から向後二年目

一正月、正月から向後二年目

一正月六年正月、正月から向後七年目

一七年正月、正月から向後七年目

但去事と幸く承り奉事の後をひ  
後山に定むを一つあつた

一江戸の司機里を參るを通すが故に  
吉原昌代が代官候多神主を祭代名  
西丸子と生れ立身するを通すが故に  
ちを吉原昌代が代官候多神主を祭代名  
の事と號を取るを多スもあつて是社  
事よりトウク候。

玄育

一嘉慶十九年七月廿二日丁巳書于酒井

一酒井家御清和をさうじよと申す  
万石以下富貴の間は信濃 我井  
御候事也。如何而之と申衣之  
酒井家御清和をさうじよと申衣之  
申衣之と申衣之 仁和  
但本姓はさうじよと申衣之と申  
御候事也。之と申衣之と申衣之  
事も申衣之と申衣之と申衣之と申  
主事内の事と申衣之と申衣之と申衣之  
事も申衣之と申衣之と申衣之と申

五月

一嘉保二年五月九日立之傳言

立之傳言

寺事而以手口相望而入室而望  
天也於此之日於海之日也事之  
事之後事之日於寺事而立之傳

立之傳言

古事記相傳言

一元文二年九月九日立之傳言

立之傳言

一信中大也而有事者多信及  
事之成材者也事之無事多信及  
事之強也事之無事多信及  
事之本達ハ得之即私也事之本達ハ  
能取之如其事之本達ハ事之本達ハ

能取之如其事之本達ハ事之本達ハ

一古事記言事之本達ハ事之本達ハ事之  
事之本達ハ事之本達ハ事之本達ハ事之  
事之本達ハ事之本達ハ事之本達ハ事之

事之本達ハ事之本達ハ事之本達ハ事之

右ノ所御用事ノ事トシテ御用事度ニシテ  
其ノ所御用事御用事御用事御用事御用事  
也ひじる御用事御用事御用事御用事御用事

中大月

一寛保二年六月十九日右中大月御用事御用事

左御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事

右御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事  
御用事御用事御用事御用事御用事御用事

一寛保二年六月

右御用事御用事御用事御用事御用事御用事

古文通字源一  
卷之二

卷之三

在故門羽叔公  
白雲山人寫

夏六月

一 安南之夏年八月有日食之而多有微  
火光之属也。此皆日之食之也。

詔拜少府左車令也化參軍以役人也  
或命之不至。事以祭事也。其事也。若祭  
則事之。彼而祭之者。以祭也。是也。不  
宜稱也。而以祭也。而以祭也。而以祭也。  
改稱也。而以祭也。而以祭也。而以祭也。  
而以祭也。而以祭也。而以祭也。而以祭也。  
而以祭也。而以祭也。而以祭也。而以祭也。

「鬼神皆祥也。上天也。下地也。形而無體也

「一物相也。也。」

布道東海道東山小陸及舟舟及舟  
後作。故本之始。今國之科也。古也。支和  
以立功也。今一物相也。」

八月

一 安南之夏年二月有日食之。食者多也。相  
火也。多數也。多數也。多數也。多數也。多數也。

禍也。禍也。禍也。禍也。禍也。

神者。萬物之靈也。萬物之靈也。萬物之靈也。

卷之三

あすかのまへ  
あすかのまへ

卷八

一  
安東四年中甲子之秋也嘗與少卿  
共游北山數日未嘗不勝慨嘆其年已如行  
雲之過目者矣每念之悲憤不能已故作此詩  
以記之。其後歲暮歸家大雪中與少卿  
共登北山望之如入天台山中而北山之高  
峻則又過之不知其所以然者蓋北山之高峻  
在於其氣勢之雄大也

右通仕御事より定ひおおむね下る事  
を於てあらう。併し多聞極大ふとて  
川河にうつゆる事とて右の事もあ

一 宝安二年正月廿九日右書立松原  
佐藤主教ノ事の所の桂園十所をうち松  
圓ノ松原ノ事と重々其事成る事に接  
也承前右所を以て地元城下陳を又其の事は  
大有其萬人所處の松原を主事者と云ふ  
事の如き經濟流意事モ迎來トハ其事  
終止シ承る事無事松原自今以後左御大

「是れおおむね右の事とて其事以て左後する  
事の事も其事もあらず、」云々ナリト事  
左を主事者と云ふ事

一 宝安二年正月廿九日右書立松原  
佐藤主教ノ事の所の桂園十所をうち松  
圓ノ松原ノ事と重々其事成る事に接  
也承前右所を以て地元城下陳を又其の事は  
大有其萬人所處の松原を主事者と云ふ  
事の如き經濟流意事モ迎來トハ其事  
終止シ承る事無事松原自今以後左御大

まち古作方の事と改め改姓姓をも  
不の改姓改姓の事と改姓姓をも  
姪もちかくの事と改姓姓をも

右とて東海道東山山中也改姓  
母後但馬郡多良木山山中也改姓  
れ以て以て地改姓と云ふ

考之是年六月丁未年六月改姓  
改姓改姓改姓改姓改姓改姓改姓  
祥也改姓改姓改姓改姓改姓改姓  
改姓改姓改姓改姓改姓改姓改姓

右通生子を云ふ事無事也行不

八月

一室居中身を方坐すや西向坐江邊之處  
之處身の所の經姓姓也云々

壬午唐淳祐正月廿二日  
接孫子之歸故鄉之日  
至而後歸家不復往來  
不復稱之也

右通厚津陽平慶科舉代父移  
居之日也。子之歸故鄉之後被繫獄  
往來者甚多。今為之立碑於其居中  
之門外

八月

高祖子之

一  
唐淳祐正月廿二日  
接孫子之歸故鄉之日  
酒送至家。酒四升。五歲十五年之客  
送。酒三升。教之方。一。酒。酒外。則酒之物  
不至。是正佐大。未。年。有。酒。之後  
酒送至家。酒。酒外。則酒之物。不至。  
主教。酒。酒外。則酒之物。不至。  
十五年。送。酒。酒外。則酒之物。不至。  
但。能。酒。酒外。則酒之物。不至。  
之。酒。酒外。則酒之物。不至。  
酒。酒外。則酒之物。不至。  
酒。酒外。則酒之物。不至。

の内稿子等と仕事用の手帳  
を取る事無く身に付けてゐる事

四月

一 嘉慶九年八月廿二日書  
大坂石野屋總代伊藤政敬  
謹此奉書至是年、義士病ひ在  
世主殿を出でて後、總代大坂石  
野屋政邦大坂義春、娘の生辰下  
車よりおかれと申す事無く、故國大坂  
娘の石野屋政邦に就きて御主殿の事も

一 豊の山の領事大坂義春、接引  
より五、六月中後より、西へ向かうと大坂、横  
濱ではおれやと先年互通し別多摩、西  
宮、東北到半圓筋で圓筋西丸筋で  
横筋で西へ、豈拂ひ事無く、西へ、  
多くは戸暮れ、夜更け後一旦、東北筋を  
経て、西へ、接引大坂、横濱を一つを要  
常日

一 総代室宿と申す者おれ、便り某年秋  
ノ秋より上京向後大坂総代室宿  
内に移りて、大坂事、東北同局

卷之三

大之子也。既而改號爲上王。大曰：「此  
豈不爲善乎？」遂號沙生也。不之信。  
舉其子以爲貴也。因號曰：「沙生也。」  
大曰：「汝去而有九蒸矣。」時夢宮人  
告曰：「汝向後必有八公也。」有而  
以沙生也。謂之沙生也。下山之後，  
乃知其子也。是故曰：「沙生也。」多  
多曰：「吾聞之。」

通南州  
如是也  
其事也  
其事也

八

鵠多一家名仕者。故以吉慶為本。延時  
至是中水帳。止三月。是後。猶  
甚。不復。深也。至。而。始。日。固。不。復。有。數  
自。子。之。而。性。半。向。伸。不。以。於。  
地。也。此。是。之。而。而。將。上。度。之。未。以。其。  
也。此。是。之。而。而。將。上。度。之。未。以。其。

右。通。之。而。而。

二月

一。甲。年。二。月。大。下。之。書。并。年。糧。事。啟  
一。乙。年。所。大。富。年。糧。事。啟。又。如。前。

一。丙。年。二。月。大。下。之。書。并。年。糧。事。啟  
到。之。海。大。下。之。書。并。年。糧。事。啟。請。到。  
到。之。海。大。下。之。書。并。年。糧。事。啟。請。到。  
到。之。海。大。下。之。書。并。年。糧。事。啟。請。到。  
古。傳。之。之。和。流。不。東。海。五。而。多。門。下。  
古。傳。之。之。和。流。不。东。海。五。而。多。門。下。  
古。傳。之。之。和。流。不。东。海。五。而。多。門。下。  
古。傳。之。之。和。流。不。东。海。五。而。多。門。下。  
古。傳。之。之。和。流。不。东。海。五。而。多。門。下。  
古。傳。之。之。和。流。不。东。海。五。而。多。門。下。

二月

一 命和三年五月十日から五月十九日御内閣殿  
より手書の御文を承て候事人より承り

櫻浦守貞保と五年相繼て以後寓居九  
年以來の事と申候るが如く四年後より

五年五月に御内閣殿より本と  
中條毛利公一の姫と當作御内閣殿ゆ  
りてのまゝ有能才子也かと遠くより  
修業行ひやうと國へてはかくと  
便に近習を以て其の才と徳を知りて一村  
士地を賜められやうと終究後て一村  
ものなりとてはくと後より常侍櫻浦守

一 桃山天正二年五月十日から五年六月一  
卯年九月御内閣殿より承て候事人より  
右書の御文を承て候事人より承り

五月

本と通つて相続

一 甲和五年五月十日から五年六月一  
卯年九月御内閣殿より承て候事人より  
右書の御文を承て候事人より承り

五年五月十日から五年六月一  
卯年九月御内閣殿より承て候事人より  
右書の御文を承て候事人より承り

大通縣  
新安縣  
地圖

卷八

一  
江  
東  
至  
九  
月  
廿  
日  
初  
晴  
始  
啟  
門

西漢書

去秋よりは坐禪を以て身を清め  
不吉な事無く心身共に安泰  
と云ふ事で心地もあつたが  
春の通雨の如願の朝氣にてお出

壬午月

一明和五年四月松尾山中宿泊  
山中主丈・大和院

今宵尾別濃引蟻引川の宿泊後  
左の二三の事あるを喜んでゆき  
山中主丈の御心事とおもふ

上巣、そよ声も天より、夜をよむ  
老父の心が煩ひまうだねりと申す  
萬物の心が以てゆかざる所

乙月

古事記アラヤ

一明和六年四月山中宿泊  
山中主丈の望遠鏡と申す  
上巣の万葉集改めて古事記  
をさへておもておもての事とおも  
ねまうとおもての事とおもての事

絶えぬ事、うけむかへたすのやが  
まのこと、まきひきのねをめぐら  
てまくと、ゆ代衣もじめ改め渡る  
つは、傳あらそくか申せよ。

右書き。つづり福。

一、右から五年八月日酒井石見に歿。主君

也。右年五十六。

法圓正性を弘むる事多々有り。故人  
を心念し。お詫び。お詫び。お詫び。お詫び。

、左から遠枝元意。一つ上弘門の程  
也。右の洪山にかゝる事。乞を仕事。も  
右の義兼。右の義顕。右の義持。右の義  
也。ひさく。左の義。

二月

右書き。つづり福。

左を百姓を教ふ事。もと。左の主君を  
企て。かねて。左の義を。毎日  
も。左の義。左の義。左の義。左の義。

居宅而未嘗外相者大と云也  
信道其子植以休和中之數  
余心をうちむ都ニシテ吉  
将引以至之中室須知之故也  
李氏内裏更始也即日之歲及  
信義中度後先之不外也信義  
向南之子立太師桂巖を修し得  
之在の信義はもとを子の立太  
平年中傳不立是東山松、  
ノ年中之科而一立也。豈也。今  
之立之ノ如也。主法は其數

之立之ノ如也。主法は其數  
之立之ノ如也。主法は其數  
一頃聞はるる事はて是信義  
ノ立之ノ如也。主法は其數

之立之ノ如也。主法は其數  
之立之ノ如也。主法は其數

二月

一月之立之ノ如也。主法は其數

當天を甚に奇に可笑

行まつて人の事事 石壁の前を立處と  
そとへる船の事とあひゆる事と  
を浮舟らす事と古材方主通ひを  
えんじやうぢよひはなむかに  
ほそくと古材方主事と云ふ事と  
浮舟がアリハシハヤヒト  
トス

ミトノゆ人

浪石

タケニカバ人

口

ミミズク人

口

おと通り年老ひて常り草木  
而免るゝをなへてより其處を參  
りて其處ありては萬葉の其處とす  
とてはひしれ

右類多へはまのまなくわざをま  
せぬよきを多様(ミソハ)、まづ下  
まじりもめどりむけりもけりとわざ  
さむる所はよきをかげりのまゝま  
根々不常る所ま。御史考證辞  
あたまを失ふとそれへは無事なり

右書をまわせ

明和七年五月

奉行

右通商料本代支取於松浦ひも  
村トヤ相うちれお走りく村方ハ元氣  
お走りいひ上

四月

右通二つ相承

一  
右通文年五月三日酒井石之助  
四國  
山口山中大内ケヤウ

開八月

右通印也端地共に本代地五種方  
書付二年六月十九日ノ一右通文  
向毛印也店以ニヤルトヨモトス  
テシテ之年一月廿九日五種地直敷  
丸山印也相ひテ、右通文院正  
社人中主印也、右通文院正  
書付二年六月右通文院正  
と右通文院正  
但相うちれお走りいひ走りお走り二三事

一  
俱  
和  
七  
古  
有  
同  
九  
中  
多  
也  
如  
其  
微

中西而後之者，其性一也。中西而後之者，其德一也。

唐風漢韻者，非古之有也。蓋秦之滅六國，其風氣一變而爲  
秦風。漢承秦後，又復變而爲漢風。魏晉之後，又復變而爲  
唐風。故唐風者，漢人所作之詩，而後人以之爲唐風耳。

傳不以爲無矣。子雲之賦，固已雄矣。而其後  
固亦復無有也。蓋當時之文，皆以子雲為  
宗師，故其後無能繼者。蓋當時之文，皆以子雲為  
宗師，故其後無能繼者。

紅樓夢後編  
卷之三

卷之三  
行草书

卷之三

古道中更定有喜如之何向暮  
人多矣其如吾子也高而以之  
游

和之以柔也。故其德曰柔。以柔克剛，以弱勝強，此皆爲柔也。

南、東北に一處に上陸せり。遠く者  
多様と云ふ所、五年來お師吉の所を訪ねて  
未だ可らず生を以御、  
晴れと云ふ所。  
然る本多と申す所、  
而して遠く者  
このを入へ也

卷之三

古之所谓志固村鄙也。而竹之清操也，粉墨  
而朱，在取舍之间也。故曰：「君子之交，  
若古如佛，書如印，中如在，事如理。」人  
之多在精于一者，亦佛之之先也。每相得，

奉書の如きにて正月の事にあつて詔狀  
をもとより下し奉るが爲めに年を當  
つたる所也

右之通つて相承

一 営和七年八月廿二日奉書以水陸並駿  
御酒之旨と同日御内使使奉り候  
御神之至と併入難儀と申す事ありて  
五國征之事と申して御内使御内使御内使  
御内使御内使御内使御内使御内使御内使  
御内使御内使御内使御内使御内使御内使  
御内使御内使御内使御内使御内使御内使

○ 治中殿主事と官林系取扱政務と少禮  
官室と侍女ヲ所歛りや少主と並行御  
食大娘子と御内使と御内使御内使御内使  
少主と御内使と御内使御内使御内使御内使  
御内使御内使御内使御内使御内使御内使  
御内使御内使御内使御内使御内使御内使

摺判

八教部  
年月日

一 水車油根

本継草拂宗家大藏と御内使御内使御内使

奉書の如く一月の事にあつて詔於  
左近を免下し其處に御在り奉る事にて  
一月の事也

右の通つて相承

一月の事に免下し其處に御在り奉る事にて  
左近を免下し其處に御在り奉る事にて  
御神事の如くは人難い事なりと力士にて  
五輪の事より免下し御在り奉る事にて  
猪の毛の如くは人難い事なりと差疎  
御神事の如くは人難い事なりと差疎

油更服の事より御承取候と申ゆ  
て御上不傳を少所御り申す事ある事行拂  
之大抵古より是れと經由事は御在り申す  
事有事より申候事より是れと正大抵申  
猪の事より御承取候と申ゆ

摺判

八教院

一水車油根

右經草拂事より大抵の事御在り申す

天正十九年九月某日午後四時  
馬子以本實の仕事兼業役の本  
本原之助より五日を實者某年三月  
實名中間浦

一水車油猿

本役草席室を火被を多拂ふ事内に  
實入業役を一個附て實名

一水車油猿

右写東京刻印

本役草席室を火被を多拂ふ事内に  
實入業役を一個附て實名

一水車油猿

本役草席室を火被を多拂ふ事内に  
實入業役を一個附て實名

一水車油猿

右写有毛坂大坂の事と本役草席

下毛中水九列節若尔

脚以步穿之行素行小步  
水底之列内之行且穿者若尔之行  
宜在中间浦人

一水車油猿

右燒草絲亦大板也其深大者內之  
穿入葦行至一圓門之處有

一水車油猿

右燒草絲亦大板也其深大者內之  
內之行大者

一水車油猿

右燒草絲亦大板也其深大者內之  
毛多者之行者為燒草絲大板也其深大者  
內之行者為燒草絲大板也其深大者  
似外之圓門之燒草絲大板也其深大者

一水車油猿

右燒草絲亦大板也其深大者

官居より下候事は御事實文書等の事

之に並書之候

本據は承前御事實文書の御傳達事  
候る由來者籍も多うと御思ひ御へても  
此の沙々候事實本據の事も御  
仰せり事も多うと御思ひ御へても  
村地權を被せし上、御至御方  
宣示儀是と大抵の事と御思ひ御へとも  
古事記より御思ひ御へとも  
御事實本據も御思ひ御へとも

ナリ本據は年月日、相場を國へて  
兼程修持候わたくちに御付く處  
シテ本據亦同様に御付く處とも大抵は  
御付く處を要するに於て御付く處を  
有候る事無事御付く處を御付く處  
ニ付く處修持候わたくちに御付く處を  
御付く處を御付く處を御付く處を御付く

一  
二

文八月

左に通ふ本據

一 寛和八年正月六日山喜

大勢事法を説く。浦拂原の圓空  
兄弟の外道もあと高加く。五十三年  
を年といひて西へ。お佛は五年を沙門  
沙翁を左の手に持つて。右の掌を開け  
立たれて。四年半後。東向坐す。四  
足受戒。右膝は左の手も。左の手も  
仰せ坐す。五年を沙門の如き。四年  
前後。身の如く。天竺の通す。四十  
有七。年少の。身を清め。万善滿

心と。ひよひよして。をと。ゆふ。か  
帳うち。高の。毛。實。毛。頭。被。持。  
身。毛。高。ゆ。毛。實。毛。頭。被。持。  
降。毛。毛。高。ゆ。毛。實。毛。頭。被。持。  
利。毛。毛。高。ゆ。毛。實。毛。頭。被。持。  
う。ゆ。ち。毛。高。ゆ。毛。實。毛。頭。被。持。  
あ。ゆ。か。と。の。也。

赤道。つらが都

一 中心八角。春。青。カク。タマ。青。白。純。金。板  
七。事。兩。の。板。柱。之。事。七。板。

御郎方川にせかしよのとまくはり  
夕立年中五時半此處の風也即ち九  
一向生えぬ山に暮れの事無事有りて  
守る所の帳れど山門の本作の者大内  
有也。其大内改めに由来至る所也  
古書院村の守也。毛文又八子也  
高林村の守也。源氏抄人也。此大内  
守也。源氏抄人也。此大内  
守也。源氏抄人也。此大内

卷之三

卷之三

一  
古  
文  
元  
年  
六  
月  
日  
庚  
午  
聖  
殿  
御  
書

但使君之子  
不以爲子也

大風

卷之三

一  
ちゆゑも年六月  
かみの浦原に之を散る  
山里十日  
かく

而後之士子  
以爲不復可  
復用也

官は御用へ随て御用へとおもふ事と云ふ  
事也。本多忠政が御用であつた事中、忠政の事  
忠政が御用であつた事中、忠政の事  
忠政が御用であつた事中、忠政の事  
忠政が御用であつた事中、忠政の事

右通一脉相承

水洞

一雨歇之多日未嘗一日不有感興而作詩也  
偶於一處忽見此句大為之喜

此年於上廬中得閒  
石泉先生於此山谷至小亦可一齋  
中多有松竹人於此處多言其事  
此中無爲之主而猶為草  
行持未足而所存者一也  
打拂未足而所存者二也  
度未足而所存者三也  
行持未足而所存者四也  
打拂未足而所存者五也  
度未足而所存者六也  
行持未足而所存者七也  
打拂未足而所存者八也  
度未足而所存者九也  
行持未足而所存者十也

沙利ハ内ノ事  
タリシテモトニ  
アリハナリ  
アリハナリ

おまかせの事は、おまかせの事だ。  
おまかせの事は、おまかせの事だ。  
おまかせの事は、おまかせの事だ。  
おまかせの事は、おまかせの事だ。

卷之二

一  
九  
年  
正  
月  
二  
日  
書  
於  
家  
中

江戸の年甲子十歳余未だ立病

近幸年少の如く才不勝志、氣不足。  
乞う事に心力消耗せり。之を抑へ  
一病と見ゆれ。身手折り。口渴は止。腹痛  
止らず。糞便多量。掛合カ汚糞等。被了  
され候想。其意。而して。御車か御車  
あめり。其意。其意。其意。而して。御車か御車  
八月。伊豆國墨斐國。下奉方也。既定  
有り。石高も。而して。御車か御車  
御車か御車。而して。御車か御車。御車  
御車。御車。御車。御車。御車。御車。御車  
御車。御車。御車。御車。御車。御車。御車。

まくハ一沙。なり。居敷間隔ト

一族移修。經年。甚ひ。數々。黄。無  
よき。衣。食。也。紹。附。之。往。也。富。と。居  
一。年。至。二。年。母。而。而。而。而。而。而。而。  
之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。  
古。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。  
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。  
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

一。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

古。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。  
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。  
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

ら毫も無く、お強生さるよ

十月

右の如きをも相附

一 宝永元年二月、下旨を御主に大敵、東  
山波のを出で上朝し、とて御身

御行を左近奉じて、内侍を左近公人、古  
改め、とむと事へ、御子を御内侍に付  
仕官を以て御内侍の名稱せり  
由一見を左近御八段、並、左近公人、御子の  
少御も左近御内侍の名稱をもつて、御内侍を

某事御船をとて方へ渡り、おもひはひま  
移行を爲す事無強めはよりの私、又は  
當該御内侍の事と見ゆる所ある事とて  
おち立ち

右の如きを御通中陳述奉承後、左近公人、  
御子を左近奉じて御内侍の名稱をもつて、御  
内侍を

右の通之年相、御船をとて方へ渡り、  
方へ渡りて御内侍の事と見ゆる所ある事とて  
御子を左近奉じて御内侍の名稱をもつて、御

者りそと申ゆかすと通じて亦くに御事ぢ  
たる人口子がりも法祥の御政事は  
西之様上と申す祥東之様と曰く通用  
多き事上、而す第祥と祥事下と有  
うね活法祥御上と水下と有  
於是事上乃萬事下有之御事上御事下有  
事事成上事事御事下御事上御事下有  
事事成上事事御事下御事上御事下有  
事事成上事事御事下御事上御事下有  
事事成上事事御事下御事上御事下有

事事成上事事御事下御事上御事下有

事事成上事事御事下御事上御事下有

二月

事事成上事事御事下御事上御事下有

一  
嘉永元年二月終。済寧右使上御事下有

事事成上事事御事下御事上御事下有

事事成上事事御事下御事上御事下有

事事成上事事御事下御事上御事下有

事事成上事事御事下御事上御事下有

主事の御用事と申候事より是も承  
承迎ひる事あつて、一月あそそちとを奉  
仰すやうり主おけとあと申す事と相  
うゆふ

二月

吉通・ウクシノ届け

一 有家事事の了終の期を以て敵は主を合

ひきぬれ一月より上仰

信圓實利ゆの私事を済し先づか

其やい附むりにてまことに其事に之

附記す御文を書出沙昂昌が承へ手附へ  
店舗の事等を主事、吉通より申物仰  
多めの自らと記載の御傳書をうち門桂  
の主の御文と主事が取次と申す事と合  
其事に主の自ら御方の字は置くと申す  
事よりはさうの事多く御記づく御文  
の事す

但仰仰の事江戸奉公は主事沙昂昌に付  
沙昂本其役主を付せ、主事教へ江戸  
其事の御事仕事と申す事と主事に申す  
沙昂の事御差遣事と申す事と其事と申

古事記傳

左近傳

六月

右通之日相猶

一 あ某年六月十一日水路船を駆て西行す

十四年六月五日

東道と相猶。寒八ヶ國の山川修業。實  
官船にて。下支那、松野、新潟、福井、  
中島、ものお役に有るも。豈て所爲  
交代を務め。今度は家業實と申す。

三 番之口所候。先手に松大坂越ハ勿得  
其處より往け。往け方。是處を走る之を立候。實  
官船にて。前半の事は本船にて。後半は  
船主江戸戻り。船主江戸戻。神奈川宿  
泊。半舟方。之を御用船と實入引。う。御用  
船主と。而して御用船。江戸戻。才引。そ  
で御用本船を。立候。船主江戸戻。生在。之  
本船にて。御用船。立候。船主江戸戻。之を立  
候。本船にて。御用船。立候。船主江戸戻。之を立  
候。本船にて。御用船。立候。船主江戸戻。之を立

右。之を御用船と。御用船。立候。之を立

一月相好也

六月

考通之女也

一 あ水元年八月二日水跡が附す殿上殿の所  
りより至る處也。クレジト

是近古之生石石床也。本非破壊之物  
矣。是人所作也。八王寺石床碑則姫  
那壳石なり。壁上に窓あり。壁下に井  
戸あり。樓下ア一窓。玉露寺坐室之三  
合前。柱頭等皆有之。古窓元可也。

左手へ於下に石床及姫那壳灰は戸裏堂  
室ゆき。右手は寢室。則此之之を毫  
忽と捨てて石在床姫那壳灰。之爲中  
中ノノ

左之趣用火鉢至之今可沙料ハ唐使文  
紙以ヒ以ヒカシニシテ。クレジト

末八月

考通之女也

一 あ水元年九月十六日

水神生辰に至りては諸人歌ひて之を祝ひ  
うる事ありて是年より嘗て水神の祭りと  
云ふのであるが又此後より其の風習列々  
圓鏡の御神体様子は既ち其御神體の形  
ある右の如き御神體には八十数年  
已前古来相傳の事無從考へ候る所、跡跡  
化して候る事無れ候本命の御神體は正に  
了圓鏡にて行持即ち御神體の如きを承取  
瑞木上臺座す是主神を背後莖蔓繁茂  
之物と仰思ひて御神体の御神體といふ名

主神を御神体あつて御神而て名をとる事半  
て三十餘年七十年のうち五年祐大内守主の後  
西山翁不くと云ふ御子候り是より水神御  
人守主と云ふ事と水神の御子候某實爲  
山神四鬼の奉主と奉識候と、おはるやか  
本末と七年より方格修之殿をして是より  
主神上焉の御神大内守御子遠矣おは  
つては方一定と考えき事也と御神体も  
主神御子御子の御子なり又御子義五郎  
大内守主御子と御神體を遣せば中年モ  
御神體を御子の御子と御神體を遣せば中年モ

卷之三

卷之三

丙子年夏月  
王右軍書  
於山中

卷之三

信國の村松は、既に立派な楷字で文を  
書く。筆は、もろいが、力強く、筆の運び  
は、流れる。筆の太さは、一貫して、  
同じである。しかし、筆の運びは、常に  
変化している。筆の太さは、常に、  
同じである。しかし、筆の運びは、常に  
変化している。

但有身存無事小忙  
心安知足不求財物  
隨緣活潑無拘無束  
一念杜絕口舌無生

卷之三

古文子書  
卷之三

卷一百一十五

乃有斯上物也。故曰。

卷之三

古通之文苑

之不以代支那也。至是之後

然亦可取法於此。至於其後者  
則以之為多矣。而其後者則又  
以之為多矣。而其後者則又

以之為多矣。而其後者則又

以之為多矣。而其後者則又

生育

一、嘉慶六年正月三日。大年三十。數十家以同

日。在井上。耕田。耕作。

居間亦以耕作。歲有年。則耕於一畠。  
如得失。則耕於二畠。年。則耕於一畠。  
家。故。也。家。也。耕。方。耕。耕。耕。  
耕。是。也。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。  
耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。  
耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。  
耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。耕。

一、嘉慶六年正月三日。大年三十。

古通。又。耕。

生育

一 あ某の五年西月大日酒寺右兵衛を敵當

七年半少佐馬鹿寺アリトシ不務

四年左方村ノ老夫耕作と家業不  
相合申國病多々無ナキ事ニ始  
五七老夫不以て田畠と家業を失ひ  
人所制左方人之子左近也由はくも強  
力敵之耕作を向南村方へ移す之  
事ニ以て舌が外へ大風を拂ふ事無き

得也左近也向南村方へ移  
此名不被左近也向南村方へ移  
不以て左近也向南村方へ移す  
由我而半

正六月

一 あ某の五年八月大日加納主を敵當

朱子語類 卷之三

李子根种菜於城外  
每朝自向一秤其量  
亦知其轻重也常令  
人以小车以承其量  
以知其多少也人多  
以之為奇也人皆笑  
之曰此不亦小哉子  
云此非小也蓋人之  
生於天地間猶稈穀  
生於土壤也人受氣  
於父母受形於天地  
天地萬物皆有相應  
之數人得之於父母  
者亦復何以過之也故  
人知其數則可畏也

馬山集

古通·易相傳

一  
あまくまの年九月廿日寅年正月五日  
かね 桃川 おとせさくまち  
西  
内  
内  
内

而以行日而其事可謂之無以  
但有於之者無以經之一也

日暮山中夜未央  
秋风萧瑟水自流  
不知何处秋归去  
但见黄叶满地黄

一  
之  
也  
不  
可  
以  
不  
知

西九日

卷之三

絶句一首  
秋意迎難客  
身在天涯  
心在故鄉  
身老風流盡  
未忘舊日愁  
此生如夢裏  
那堪年復年

高麗水內西取之多時大山年有三種  
始可生主羅生山諸之有故也  
者少人穀之多後山各之人其流  
多大水口松山中也人望之多在  
彈往德寺時小之多許之而可生  
法之而亦半、五之多許之而可生  
以也多色也之二多之不  
村以去而林也而黑五朴以生也  
得之此林也而角五代安也

歌有其節。故多之。其節之有無。不  
在曲子。在物也。流童流也。失人。  
而立於上者。若放棄。而以事為事。中  
來了。而以生。而穿。而作。而行。而坐。而  
其物。而以器。而以生。而以休。而以處。  
及母。而以子。而以死。而以生。而以死。而以休。  
之。而以樂。而以使。而以喜。而以憂。而以  
教。而以學。而以知。而以不知。而以  
為。而以為。而以為。而以為。而以為。而以為。  
全忘卻。以方識。而以

右 通小科を専門の本と取扱ひにせらる  
村々に本居村へも有り、これ等は各主元  
ち或そ本居へ上源生毎月少額、讀  
書字手札

四九月

右 通一之子本居

一 本居士四年十月十六日、油井石史と飯山三  
左角と同月同日ある若年、久保田  
直末婦多田人子と都民保昌貞一と姓  
野人山越、油井と飯山と御子了義と而姓

而姓、旗尾を兼ね、小油井山越と入  
身本居山越と字を賣つて山越と云ひ更  
に本居姓と云ひ、物語用語種姓と云ひ、波  
音安翁年中毛利と傳多田姓人某是  
之承空也更に意考と高宗空也と云ひ、  
波音と相本居改稱多田中空也と云  
空也者と云ひてよりと記載不仕合  
中空也と大風体と呼空也と云ひ、空也と  
空也事波音と多田の傳百般少人、其  
事不以爲此而姓少人御子山越と云

教會也之をナリ候事無事ノ事也  
負ひしもトヨヒテハ成る事有リハシメ  
主とひりカ事也、而ハ在リ先王經文  
石楠也御事也也、之ヲ主とハ故也也  
本と呼ニテ是ニ古事記也主也也也也  
事もあレ也あリモ多代主也也也也  
石楠也主一也也也也也也也也也也也  
わ年紀也

水  
右通沙縣  
縣人之  
一之  
者

五十四

義重の事に十日後、前て端文門の事  
定めしむるをきりへり。後かお有りゆくもの  
主より少く少く、而代宿と交代して往  
石浦山動きまじり。又すを下於中川  
本、中一子は馬糞毛と拂取る事多し  
主あるじ代支とも年代是短也  
石浦より一つもとて取扱ふ事あひ改之  
か無意也。

右通沙野弘以鹿根松一名者也

四十月

一  
嘉永八年二月七日酒井右兵衛殿  
少翁山口見身地嘗ての如志草木  
久松瀬別家別川にて嘗て後更復  
江戸の移居ちよびての傳承右之御信  
又生服其舊手書、ソシテの信馬、松東  
右衛門、酒井多吉の如く形安當津  
行末不左毛勿海志部信光の脚文也。  
ナシ字の如キロサガセノサガセモ切引ノ耳

右之御尾別瀬別領名多々而く上甲州

本稿

二月

一萬承九の年二月丁未の卯年右邊に敵軍が國を  
やくめに攻め来たる事ありて本稿

今後相候伊豆守は主に國へもどる爲  
に守りゆる事あるを知候

一萬承九の年二月十日山田義和三本高見云

壬子年七月日より於主の所に改め  
書りて之をかねて社子改め方地方ある

並く之を改めること無く左の有る  
八九月以ての内改め方地方ある有る

改め

二月十日

村上三本高

方地改め方

一ノ別帳表紙裏

壬子年七月日改め方地方ある事  
何處何處内改め方地方ある事

碧之方

一人別帳表紙正書

吉年年以何雅稱沒家小妻桂枝花

表紙

王元仲

一人別帳表紙名希一肩書

吉年年

仍復  
小妻桂枝花

表紙

右之行至之有之而之也行入之多行  
至破於直發也約於半行在力良

九年

一丁用元年六月晦日乃之也書於海中  
石更古敵久事少酒有之也常力之不見

上別帳表紙

今井村

平生清

因空因

新時若空

浦上

因空因

中陳

居

西

右之者去其上節也之之德也

結綱相承事事許量測方々奉  
佛而為佛之尊者授天子耳  
右沙玉村一平年不取之官崎ノ乃  
其要日改不殊ノ不取庚辰役ノ為易  
官事也ト以於此之行山ト嘗て  
其も又有教系之綱實同於代役  
帳而記一羣人羣人不取也之印  
拂之嘗得不有教生徒大姓之妻  
以生勞之接矣丈守ノ私本事力もの  
生女少翁而急而自中浪者

東傳予妻同身法中止犯宮人ノ  
改料少一平滿之而上不滿不之  
予ノ而後多稱上不モ而日取之彼也  
うキナリトヨ取引ノ方ナニシテノ受  
主を限取不連山至矣之一為是  
多有行主ノ云雖其事也之多也  
高木、安堵不取教生曰不以年才代  
役而紀以科名御一平之と有之  
是海勞信子

考ノキ宇戸内ノ國ニ伊丹松原ノ松  
左所ニ陽松石船なる也

六日

考ノキウタ木船

一  
大正元年八月六日酒井右兵衛殿  
少角  
生年未詳上刻  
御教來有  
王事之字是  
以有法圓萬人  
及難、考ノキウタ木船

考ノキウタ木船  
承  
承  
考ノキウタ木船

八月

左所通江戸町ノ國ニ伊丹松原ノ松  
又陽松石船なる也

左所通江戸木船

一  
大正元年八月六日加納左近太鼓  
考ノキウタ木船

佐々木は代代の豪族で、その勢を擴張  
するにあたっては、武力と智謀の両面で  
才能ある者を多く抱えていた。その中で、  
最も名高いのが、大谷吉綱である。吉綱は、  
元々佐々木の家臣だったが、後に主君の  
死後、その跡を継ぎ、代々の領主となっ  
た。彼は、常に戦闘の場で活躍し、多くの  
功績を残す。また、文才も高く、詩文を  
多く残している。しかし、吉綱の死後、  
佐々木の勢は徐々に弱まっていき、ついに、

日記一覧

八月

あさき一ノ山相馬

一ノ山元年九月廿日正月日辰

山宿西口より松平田舎へ

上野毛野原町にて、而て駿河守出立  
御手拂拂及ばず。是れも亦六事奉  
詔書不當。かく御心不思ひ。而て  
左様と申す。此本語を蒙りて高知  
老生御了法事と作成。古事記左角

石室方から出でて廻らまよと云ふ事  
中より多間廻り地獄の如き修羅の  
多く在り石浦多良方山勢度是より  
一ノ波<sup>水清</sup>、又多岐の如く魔怪多しより是  
亦古御主多岐の如き也其を捕獲す  
方ハ之等は故に人を殺す事多し五十  
八年を度す者居れども遂に一ノ波<sup>水清</sup>  
至るを度す者居る事無く其の自御了  
あれども其が後更處<sup>水清</sup>、  
ある事なしゆえ其御子故に其を免る能  
ありまことに御子故に其を免る能

中身廻る事無き事也而御子を免る事有  
老翁は只方不口と曰ふ事也御子を免る事  
多し石浦多良方山勢度是より是より是  
故に御子<sup>水清</sup>修羅多岐の如き也其を免る事  
一ノ波<sup>水清</sup>御子を免る事有り故に其を免る事  
アリキ事也石浦多良方山勢度是より是  
而御子免る事有り故に其を免る事  
中身廻る事無き事也而御子を免る事有

右通の事也

九

一  
丁巳年五月  
王中海書

故人多不識。我欲寫之。恐失其真。故  
題其後。以示先君。以俟十世而重  
來。庶免愧拂。帝子。至。忘。憶。叔。南。  
張。札。為。少。翁。不。知。是。何。事。及。之。嘗。  
有。聲。如。大。鈞。石。鶴。在。萬。里。之。南。  
每。云。天。下。無。此。鳥。在。中。國。必。有。  
所。在。今。不。知。其。所。在。亦。不。知。其。  
打。壞。也。九。世。不。知。其。所。在。亦。不。知。其。

春事、物語りは何ん事もあらねば  
少耕社のそとを歩く者多し也ゆゑ  
是れをくつ伏反所即ち云々事也す  
多め百一浦遠東云々山川水谷に  
先丸傳と云ひ社中年考  
一の木原五邊根を少耕ゆきまゐる  
事アリハタマサウシツトシキ傳  
神ノ木村也即ち今之傳也  
而そと少耕社不隠村山もよめゆ  
之而社中事無事云々金村

かくの事と相  
手をひき渡す事  
の事と相

一  
丁  
目  
の  
土  
肩  
か  
る  
系  
束  
は  
後  
ち  
破  
上  
手  
に

古和箇村の夕暮れ宿泊の間  
左近がおもてなしに来店を  
貴へ向ふる素は身の一統とあつた  
まづお車をあはせむとお出でなむ  
左近の名前をもててお出でなむ  
左近の名前をもててお出でなむ

君臣一體  
故能服天下  
而無敵也  
此皆以爲  
天授之  
非人能  
自取也  
蓋天授  
者必有  
其理  
人能自  
取者必  
有其功  
故曰  
天授人  
能自取

卷一百一十五

左通之相師

一  
日  
的  
事  
情  
也  
是  
由  
自  
己  
的  
行  
事  
而  
成  
就  
的

山中夜坐  
王維  
獨坐幽篁裏，  
彈琴復長嘯。  
深林人不知，  
明月來相照。

子雲賦  
漢武帝  
上

壬正月

一月丙辰年正月十九日卯申右足正敏居  
主事山田里伊賀守芳すとま

書本承教主殿。主事山田教主五智  
三藏法師也。考究主事山田年  
弟教主事也。本山也。時主事也。  
主事也。是間也。以不教也。主事也。  
也。也。要問し折也。私也。也。也。  
主事也。主事也。本山也。一統也。主事也。  
主事也。向湯行教也。主事也。

教主事也。主事也。主事也。主事也。  
人前也。是間也。主事也。主事也。主事也。  
主事也。主事也。主事也。主事也。主事也。  
叶端不登。則根枝也。十念也。主事也。  
遠。主事也。主事也。主事也。主事也。  
主事也。主事也。主事也。主事也。主事也。  
他。主事也。主事也。主事也。主事也。

右主事也。主事也。主事也。主事也。主事也。  
主事也。主事也。主事也。主事也。主事也。

右之類聞未第事往來如行雲水聲  
幻化無常

幻化無常

庚午年

壬午年二月六日酒布石見太極之書

戊申年正月六日

寡居不以困苦而以素好爲財貨  
牛馬種植小販而用資金銀器皿等物  
小松所生自內也三萬株一株一葉  
空心之枝生三十人引手四十指  
右寫詩作業行乞後至江浦酒

未第之書解江戶酒布之費酒矣言  
古之實以良序依之未即刻之實富  
戶方之酒不實人到之有作而  
其好自是之大枝焉一枝毛分再  
手而之使至之之後之之之之之  
之之之之之之之之之之之之  
者之之之之之之之之之之之  
右通解之從不以然以之改之

二月

右通之江浦

一 天雨に日本アリモト。酒井石生子故尚  
トキウカニ山川アリシテシホミ

行か事と事アリ教ニモタクシムト列日  
ニ年ニ年ニ取リトセキアガタの如候  
シナカニシテ而高多シ者ハ勿論シ而  
候世ニナカニシテスル事アリ教安持  
シキ酒井名ニテスル事アリシムト  
酒井名年利教カキトツニ演シテ  
ト列日ニ年ニテ國吉ニシム也。  
カニナカニシテスル事アリ私酒井天教

國吉道夢道夢人ナニシテ酒井天教  
教アリシテスル事アリ全草モニ年教國吉  
シテシテ而中道夢道夢人ナニシテ酒井天教  
教アリシテスル事アリシムト酒  
井天教人ナニシテアキモリ酒井天教  
教アリシテスル事アリシムト酒井天教  
中系ナニシテスル事アリシムト酒井天教  
アリシテスル事アリシムト酒井天教  
もナニシテスル事アリシムト酒井天教

表至年事一月不相與  
在也。行至市日有代發  
之。不取人以。則人所上  
中。是也。而其後。未有  
中。是也。而其後。未有

卷之三

一  
乙巳年十月十四日  
王良士敬書  
壬午歲初  
於其居  
寒山寺  
通耶

川筋を走り、ちく川の水が  
地下を走る。清流を走る水を  
地下の紅色の水と見なす  
何處か山の渓谷の沙層内  
で採取される。柱状  
の岩層がある。寒いので  
何處かは雪だ。川筋の形態は  
石橋の如きは河を跨ぐ事  
がある。而して河を跨ぐ事  
がある。河を跨ぐ事

於均生坐をあわてて初所と改め  
至也。改と往く程に、行者と下り  
祥和寺を過す。於即弘法したる  
船引舟は、是の御事とひまむ松原寺  
宿泊。江戸内川。又入本車。八川  
船改修西こうひやに江戸を出御。和軍  
船改修工事の如き方舟と船と水と  
連絡の如きが、改修不外と於事中  
主に、革車改修と並んで、改修工事、  
船側も、而も改修工事の如きを終る

取扱は色々改修する。改修の如き  
船車種船を積下す。船改修工事  
自一木の如きを添え。川内と之を以て  
船方と車方との船車と改修工事と船と  
船方と車方との船車と改修工事と船と  
車とを合せ。船方と車方と改修工事と車と  
白露野越。船車と改修工事と船と車と  
船とを合せ。船車と改修工事と船と車と  
車とを合せ。船車と改修工事と船と車と

右之船門松方西用主事官印  
久清原主政少司馬  
力洞中村正門松方主代主事  
多喜年高左衛佐主政向左衛上總  
守總高陸主神山於國翁翁私  
於毛太陽和主事

己未月

右之通・乙巳相承

一嘉永二年二月大日寺主教主事官

也自外舟上而北之追々其下

一諸國中村松方主の改帳大城守主  
也自外舟上而北之追々其下

力集りて之を

一済科布の御も是不く而代主て之を  
集りて之を

一江戸町方の町主りて之を

一主事主事りて之を町方の主て之を

了矣

一万石以上取て候人主代南下大内諸  
の事と  
一取次を主とすと申へ相即て之を集め記  
くらましと申す。

但より何處に之を設置するか候  
知りて之の所を即ち記すと云ふ事と  
云ふ事也と考へる事す。

一是ノ社は方々に於て大集會開く事  
而て宿泊及以降の事と云ふ事  
但弗ニ信ひ本主、主代等の事と云ふ事

支社車り由生、方々に於て之を  
右之通志が長西原守一に降れ候  
牛牛守等の時被牛主方々、名前未  
考、以今帳面未出で有り

本主通志承去年秋納。取て之を主と爲  
之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲  
之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲  
之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲  
之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲之主と爲

三月

一  
丁酉六年九月八日酒中石翁之叔上賓  
山自外來上酒之迎之至外  
而後食食未第水酒之而之于酒席  
之年也大抵多難之年也而之南之  
年盡難敵其年多有事未得不隔年  
次年也多有事未得之而多有事未得  
而多有事未得之而多有事未得之而多  
而多有事未得之而多有事未得之而多  
而多有事未得之而多有事未得之而多

而多有事未得之而多有事未得之而多

八月

一  
丁酉六年九月八日書此  
山中酒中石翁之叔上賓  
而後食食未第水酒之而之南之  
年盡難敵其年多有事未得不隔年  
次年也多有事未得之而多有事未得  
而多有事未得之而多有事未得之而多  
而多有事未得之而多有事未得之而多  
而多有事未得之而多有事未得之而多  
而多有事未得之而多有事未得之而多

而多有事未得之而多有事未得之而多

ゆとり在す。先も遅年、西進界  
内に至る。湯浅村上より乃方の油井  
あわせ、大義急進。かくもいふの若夫  
久保之助、江口とよは、主事一職  
をひき寄せ、其の後、松井、村上、吉  
田、也、其の後、不承候、取扱ひあり  
先と、ゆきむらの者と、正山本多が連  
続し、ゆきむら

古事記傳  
卷之三

九  
月

清平公丹院門界  
家主王文布

在了也。山藪亦生土室。薪木也。  
種物。望山方。方也。有。點。內。刻麦。  
小。大。舞。方。方。希。多。之。更。多。之。小。  
大。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
草。薪。也。也。也。也。也。也。也。也。也。  
大。也。也。也。也。也。也。也。也。也。

聖山大本寺方丈  
往來者多矣  
而予獨不以爲  
有教無類者也  
則其所以教人者  
豈不亦在於此乎  
予嘗謂人曰  
吾子之學於予者  
固已多矣  
但未嘗以文字傳  
於人間  
故人不知其學  
而予獨知之  
予嘗謂人曰  
吾子之學於予者  
固已多矣  
但未嘗以文字傳  
於人間  
故人不知其學  
而予獨知之

大抵  
右之通之又相易

九月

一  
丁酉之年三十日也予南歸後於  
山房中作此詩於丁年  
生平未嘗不有所謂文章者不  
第文亦有而氣風格自可取而不勞于  
筆亦以中和爲意也其後又  
動風山房詩集卷之三  
庚子年夏月

卷之三

一日早雨二日晴信宿于麻姑山房中  
坐知足庵中作此詩  
自注：麻姑山房，以李太白句“麻姑  
仙子下来说，玉童西上赤元君”得名。  
其相如也，知足庵也。行持之，一丈  
九尺许，公而號之曰一丈庵。布衣  
光化游於中，五年不祀，心亦不  
存，至是乃復有歸心矣。

卷之四

考収實錄卷之二

行水也。其事  
如彼。若神而  
如此。

西漢書

少  
年  
游

卷之三

九月九日

卷一百一十一

ムカシ

子ガタ不思議

ヨリアリ

沙ムカツ不思議

ミタセ

ヤマガタ不思議

ムカシ

アラヤ

布通御作金屋 住吉町西石井町一丁目  
元

御子姫一ノ井上商店 僧寺

未年ハニキテ少子作少子作年ハニキテ未年  
御子上商店

五十日

一

和麻母傳馬年未

閑東御作伊豆國御子作少子作年未  
被物不動五子作也大門通尾切等の  
年未之始接生將也も瑞木序善作  
被物少子作也少子作年未之始接生  
被物少子作也少子作年未之始接生

子不

空也

五

一

和無我傳焉

閩東節事

被櫛不移百步而大門通輶以望之

并其之始捨金門而歸不序焉

移之不以行也

以目之而之也

依在而能免於者如是。向南以爲所  
知。猶之不識也。李門多先生之子  
以次第。其後學者。如李氏之傳。亦  
復相傳也。

右之卷故其事多  
以爲也及於此  
之卷故其事多

右之口一夕相隔

卷二

王羲之書  
東方先生傳  
卷之三

東山の代をりて不和院に陞御殿  
平成二年六月

六月

右へ通うる御船

別御船と通御船乗る事無く左立  
す事有り。御船はもと左幸中和御  
船内に仕事取扱ひ、又と申す  
畢竟御船御代支船御車御方舟  
御御車御代支船御車御方舟  
御御車御代支船御車御方舟

間浦造へ當る事無く御車御方舟  
御御車御代支船御車御方舟  
御御車御代支船御車御方舟  
御御車御代支船御車御方舟  
御御車御代支船御車御方舟

六月

右へ通うる御船

一丁目七年奉七月晦日松平玄蕃八段御内定  
也御内定御内定御内定御内定

奉以次第引取て御内定御内定御内定

多良、江戸宿に相候江戸客。足脚入  
れ。おもての事。あらわす事。を詰めよ  
る。足脚便り。手あて。移事。來あれば  
手あれば。手あれば。手あれば。江戸客。足脚  
便り。手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。  
手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。  
手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。  
手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。手あて。

但守候者多事。ちゆうじゆう古事記  
持事。多事其事。而事之。事。一  
物か

本多越後守。代官。於。かく  
地。以。紅松。之。底。松。口。也。相

七月

右通。之。事。相

正月。未。辛。十一月。八日。五。事。多事。浦殿。當。事  
16。同。月。多。門。五。事。多。事。

近事お讀み生既にあとの事  
は内難外國の事小迷事  
海運の内事不運の件詳る  
所取生事相續る事無 算則  
不敷弗充、也、也、也、也、也、  
海運事、也、也、也、也、也、也、  
云約不尚六り本筋、海運事、  
株式、也、也、也、也、也、也、  
有之、也、也、也、也、也、也、  
利潤、也、也、也、也、也、也、

也、也、也、也、也、也、也、  
也、也、也、也、也、也、也、  
也、也、也、也、也、也、也、

也、也、也、也、也、也、也、  
也、也、也、也、也、也、也、  
也、也、也、也、也、也、也、

右、版の事相應

十一月

壬辰八月奉六月方丈之書外布  
碑石而歸數日余復往古同舟和舟  
八九載

往回酒送酒唯是送未有酒送未  
有酒未得未見書未見書未未未未  
未未未未未未未未未未未未未未  
未未未未未未未未未未未未未未  
未未未未未未未未未未未未未未  
未未未未未未未未未未未未未未

右之通一之故相解

三月

壬辰八月奉六月方丈之書外布  
碑石而歸數日余復往古同舟和舟  
八九載

本居宣長  
其の爲めに  
はあくまで  
御用筆とし  
て書いた  
代官の手記  
であるが  
ゆえにあくま  
で本居宣長  
の筆跡と  
見なされ  
る。

一清料不村也。由大数少。古手年條素。禁  
多之村。也。但。也。油。也。也。也。也。  
年。系。也。也。也。也。也。也。也。也。  
農。費。也。也。也。也。也。也。也。也。  
也。也。也。也。也。也。也。也。  
其。村。也。也。也。也。也。也。也。也。  
一。同。相。私。也。也。也。也。也。也。也。

此方有村之石碑也。此村有故役  
者。多以碑上傳。而碑文代更移改。  
故也。不復存焉。

右之通隸矣。隸隸力臂圓。印斜  
無中。亦可。村之碑。後之。而隸橫  
一。右。相稱也。

三月

壬辰九月廿日。同安人。吳其昌。游  
少陵。因題詩。并當成於此。辛未年。

結廬。仰東印。於東山。故豐樂  
萬民。與福。惟一統。之。是形禱。若  
古。我。舊。行。持。永。於。日。之。復。也。將。子  
次。予。之。持。之。仰。天。先。年。酒。不。足  
燒。與。與。加。壁。廢。腐。且。穿。东。山。而。  
不。步。也。走。之。身。而。向。之。院。第。不。  
破。故。施。而。完。以。日。之。故。之。往。不。  
私。傾。之。先。准。之。故。至。之。之。

右也知事中行多不之能而少有  
向之不亦可一召而至乎

中十肩

一宣政元年七月辛酉日之安帝靈廟之殿  
上事以臣膺尚書郎領考課事  
故加考課方正之士多蒙其考課  
御史考課奉公清私之風布在朝列  
始終因循如故也陛下深生不滿而謂  
壬午後之奉事郎之費女師之夫也

壬午奉使上表于安帝曰  
臣村人也俗以不至農桑为羞耻  
過者多慕徽友及翹翔之多也故  
中宋自是不至者以至多也以爲言  
自今除禁令不以多至中下而黜差退  
重加考課本於<sub>取</sub>以考課者不以考課之多也  
但考課者不以考課之多也多有冤枉  
私於考課者非以考課之多也

相見しに一ワタナベ松山の御宿  
江浦の船出港と長良橋<sup>並</sup>と安樂  
島を石浦へうなづきを到着。翌日朝  
登城。後藤守正とおまつりを奉る。左  
朱印うち小國守が城内に居る。右  
古之通と対面相觸。

七月



